

## 学位請求論文審査報告書

氏名 柏樹 貴弘  
論文題目 「不定」の思想から見た親鸞の救済観  
— 『大般涅槃経要文』と『教行信証』の思想的連関を通して—  
審査委員 主査 大谷大学教授 一楽 真  
博士（文学）〔大谷大学〕  
副査 大谷大学教授 三木 彰円  
副査 大谷大学名誉教授 藤嶽 明信  
副査 大谷大学名誉教授 織田 顕祐  
博士（文学）〔大谷大学〕

### I. 論文内容の要旨

本論文は、『涅槃経』に説かれる「不定」の思想に注目して親鸞の救済観について考察する論文である。本文135頁、註20頁からなる。

論者は一闡提の成仏、救済の可能性を「不定」の語に見定め、それを親鸞が『大般涅槃経要文』に抄出していることから、まずは『大般涅槃経要文』の意義について確かめようとしている。そのため、まずは『大般涅槃経要文』の構成を含め、基本的な内容を確認していく。その上で、『教行信証』における抄出との違いを確かめて、親鸞の意図を尋ねている。親鸞は『見聞集』においても『涅槃経』を抄出しているが、論者はそれも検討の対象とし、親鸞における『涅槃経』が有する意味を浮き彫りにしようとしている。

『大般涅槃経要文』には、親鸞の自釈や奥書などがなく、いつ執筆されたかも明らかではない。そのために、これまでは親鸞の思想を読み解いていくものとしては扱われず、『教行信証』の下敷きという見方しかされてこなかった。それに対し論者は、「要文」という名が示す通り、親鸞にとって重要な経文が抄出されているという視点に立って、『大般涅槃経要文』と『見聞集』を丁寧に読み込んでいる。これは今までになかった見方であり、親鸞にとっての『涅槃経』を考察する新しい方法を提示したと言える。

全体の構成は以下の通りである。

### 序章

第一節 「不定」の思想について

第二節 『大般涅槃経要文』について

第一項 『大般涅槃経要文』に対する先人の見解—宇野順治の説を基に—

第二項 筆跡による成立時期の勘案—重見一行の説を基に—

第三節 『大般涅槃経要文』の意義

第四節 本論の構成

第一章 『大般涅槃経要文』に見られる不定の思想について

緒言

第一節 『大般涅槃経』における不定の思想

第二節 『大般涅槃経要文』における業の不定

第一項	『大般涅槃經要文』の構成と書誌情報について
第二項	「師子吼菩薩品」抄出文に説かれる業の不定について
第三節	『大般涅槃經要文』から見えてくる親鸞の思想展開
第一項	転重軽受
第二項	「転」についての理解
小結	
第二章	知諸根力における断善根の救济—「真仏土卷」と『大般涅槃經要文』の比較を通して—
緒言	
第一節	善星について
第二節	「真仏土卷」における知諸根力理解
第三節	『大般涅槃經要文』における知諸根力理解
第四節	断善根の救济
第五節	断善根注目の意図
小結	
第三章	「信楽积」から見える菩薩の活動内容—『大般涅槃經要文』との思想的連関を通して—
緒言	
第一節	「信楽积」の展開
第二節	四無量心・一子地について—「梵行品」の内容に注目して—
第三節	「信楽积」中における『涅槃經』抄出の意義
第一項	「大慈大悲・大喜大捨」—二十五有に随順する菩薩—
第二項	「大信心・一子地」—親鸞における信心の特異性—
第四節	菩提の因としての信心
小結	
第四章	阿闍世の救济と業の不定の関係
緒言	
第一節	「信卷」における阿闍世の物語抄出の眼目
第二節	親鸞における二つの阿闍世観—『見聞集』所収の『涅槃經』の立場から—
第一項	構成と書誌情報について
第二項	『見聞集 涅槃經』に抄出される阿闍世の物語の概要
第三項	『見聞集』所収の『涅槃經』の阿闍世観
第三節	「信卷」の阿闍世観—外道における業の理解に注目して—
第一項	六臣の態度
第二項	親鸞における六臣と六師の抄出意図
第四節	「信卷」の阿闍世観—業の不定について—
第一項	耆婆の態度と慚愧について
第二項	釈尊の説教
小結	
結	

全体は五章立てで、序章では、まず『涅槃經』の「不定」に着目する理由と、『大般涅槃經要文』(以下、『涅槃經要文』)がどのような書であるかを述べている。以下、簡単に各章の内容について概観しておく。

第一章は『涅槃經要文』に見られる不定の思想について」と題して、不定の思想が有する意義を論じている。初めに『涅槃經要文』の書誌を確かめた上で、『涅槃經』の「不定」について概観し、親鸞が抄出する「師子吼菩薩品」の文を読解することにより、親鸞の意図を尋ねようとしている。そして、『涅槃經』の中で絶対に救われない存在と言える一闍提が、いかにして救済の可能性を回復するのかについて述べている。『涅槃經』では「一闍提不成仏」も説かれるが、親鸞はその箇所を引用しないことに留意する必要があることを指摘している。もちろん、一闍提が一闍提のまま救われるということではなく、一闍提の状態を離脱し、一闍提ではなくなって救われるのであり、この根底に「不定」という思想があると論じている。

第二章は「知諸根力における断善根の救済—「真仏土巻」と『涅槃經要文』の比較を通して—」と題して、『涅槃經要文』と「真仏土巻」に焦点を当て、親鸞が断善根としての一闍提に注目する目的を尋ねるとともに、「仏の知諸根力」による救済が説かれる点についての両者の違いを確認している。その際に、『涅槃經要文』に抄出されている「迦葉菩薩品」の文に注目している。この箇所は「真仏土巻」に引用される箇所と一部同じであり、仏の知諸根力による一闍提の救済が説かれている。論者は『涅槃經要文』と「真仏土巻」の文を対比し、一闍提救済の視点を考察している。また、両者の違いを通して、『涅槃經要文』が独立した意図をもって形成されたものであることを論じている。

第三章は「信楽釈」から見える菩薩の活動内容—『涅槃經要文』との思想的連関を通して—」と題して、「信巻」「信楽釈」に抄出される『涅槃經』と『涅槃經要文』から見える親鸞の思索の連関を中心に尋ねている。その上で、特に法蔵菩薩の衆生済度のはたらきについて考察している。その際、「成仏の可能性」と理解されることが多い仏性が、親鸞において「信心仏性」と押さえられることを踏まえ、四無量心によって示される法蔵菩薩の大悲の現れであることを述べている。また、その大悲は二十五有という衆生の迷いを現場においてはたらくことを確かめている。

第四章は「阿闍世の救済と業の不定の関係」と題して、「信巻」における阿闍世の物語に注目し、『見聞集 涅槃經』との比較を行っている。特に「信巻」の引用が多くなっていることに注意して、阿闍世の獲信の過程に救済の事実を確かめようとしている。「信巻」には『見聞集 涅槃經』に抄出される文はすべて引用されており、更に多くの文が「信巻」には引用されることから、阿闍世の苦悩に注意する親鸞の意図を尋ねている。そして、『見聞集 涅槃經』では仏のはたらきを受ける機としての阿闍世に中心が置かれているのに対し、「信巻」では阿闍世の苦悩とその救済に重きがあると述べる。また、六臣と六師の引用については特に詳しく尋ねている。その上で、『涅槃經』に説かれる「不定」の思想が一闍提救済の根拠になっていることを論述している。

結論として、論者は次のようにまとめている。『涅槃經』に説かれる「不定」が一闍提救済の根底となる思想であること、また同時に、仏菩薩が衆生救済を成立させる根拠にもなっているということである。第一の点よりは「愚痴の人」の救済という課題を読み取ることができ、第二の点からは地獄に生じて衆生にはたらきかける菩薩の様相が明らかになる、

と述べる。これらが親鸞によって抄出された『涅槃経要文』であると論者は結んでいる。

## II. 論文審査結果の要旨

本論文は親鸞が抄出した『涅槃経』を丁寧に読解することにより、親鸞の意図を明らかにしようとしたという点からは、大へん重要な課題に取り組んだ論文と言える。また『涅槃経要文』が、『教行信証』の下敷きということだけでなく、独立した思想を読み取れるという視点を提起していることはこれまでにない独自の視点と言える。特に、『涅槃経要文』および『見聞集 涅槃経』を読み解いていくことの重要性を示したことは優れており、親鸞の思想研究に新たな視座を提示したという点は大いに評価できる。これは『教行信証』を読解する際にも大切な方法であり、親鸞がどの言葉をどの順序で引用したか、またどこを「乃至」(中略)しているかという引用抄出について厳密に尋ねていくことにもつながる。その意味で、『教行信証』の読解についても新たな課題を提起していると言える。

口述試問においては、課題となる点、また不十分な点などについて確かめた。すべてについて触れることはできないので、主なものだけ以下に記しておく。

1、論者がテーマとしている「不定」が救済の前提であり、それを救済観と考えるのは妥当であるかどうか。また、『涅槃経』だけに特有ということではないことを確かめる必要がある。

2、はじめに「不定」「不決定」がどういう思想かをもっと押さえる必要がある。『涅槃経』全体を通しての理解が十分とは言えない。さらなる検討が求められる。また、親鸞が語る本願の救済との関係を丁寧に論ずるべきであった。

3、『涅槃経要文』『見聞集 涅槃経』を読み込む取り組みは大事だが、独自の思想書であることを前提にして読むことに無理はないだろうか。この点はさらに検討を要する。

4、「親鸞の救済観」というテーマから言えば、『教行信証』を中心に扱っている第四章、第四章をもっと詳しく論じてほしかった。

5、紙幅の関係もあってか、たくさん注が付されているが、注に回すのではなく本文で述べるべきだったと思われるものも多い。特に論者の見解を述べるものは、注に回さない方がよい。

以上のように、本論文には今後さらに考察を深めていくべき点がある。しかし、これらは論者が提起した見解によって見えてきた課題であり、その意味でも、親鸞にとっての『涅槃経』をどう読むかという視点を、本論文が提示していることは間違いない。博士の学位請求論文としての要件は十分満たしている。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により 2022 年 1 月 7 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、柏樹貴弘に大谷大学博士(文学)の学位を授与することが適当と判断した。